

平成28年 産業研究所

高知県安芸市まちづくりプロジェクト参加学生 報告書



関西学院大学 産業研究所

■プロジェクトの概要・目的：

「じゃこ（関西方面ではしらす）の聖地」として名高い高知県安芸市における一大イベント「全国ご当地じゃこサミット」の運営参加を通じて、まちおこしについて学びます。

安芸市では、進行する人口減少に対抗するために、地域に焦点をあてた地域ブランド化施策を実施しています。特産品としては日本屈指の生産量を誇るナス、柚子、じゃこ（しらす）などがあり、歴史資源としては「岩崎弥太郎の生誕地」などのPRを行っています。中でもじゃこの聖地化は、平成21年からの活動の中で全国サミット「じゃこサミット」の展開を行うなど、メディアからも注目を集め始めています。

今回のプロジェクトは、集客イベントを通じて地域と学生が連携し、特産品であるじゃこを活用した新しい地域的话题を作っていこうという企画です。

■活動内容：

①「実行委員会」へのヒアリングとレポーティング

じゃこサミットを主催する市民団体「ちりめん井楽会」や市役所等に対してヒアリングを実施し、現状の課題、今後のあるべき姿などを模索します。

②「じゃこサミット」におけるボランティアサポート

参加者は、ボランティアスタッフとして、じゃこサミットをサポートします。

「じゃこサミット」とは…

今年で4回目を迎える全国で唯一「じゃこ」にテーマをしぼった全国規模のフードバトル。合計15店舗以上が全国から集結して、消費者の投票によってグランプリを競っています。去年は2日間で3万人が訪れました。



■日時・定員

日 時：2016年10月8日（土）～9日（日）

■参加者

総合政策学部女子学生3名（4年生）・商学部男子学生2名（4年生・3年生）

■受入先

安芸「釜あげちりめん丼」楽会事務局（安芸商工会議所・安芸市商工観光水産課）

■目標（各自が設定した参加当初の目標）

- ・持続可能な町おこしイベントを体験する。また主催者である地域の方から、直接町おこしへの思いを伺う。
- ・「地域活性化」や「地域ブランド化」に対して自分の意見を持てるようになる
- ・”私”にできることで安芸市に地域貢献する
- ・地域振興について学ぶ
- ・地域振興の現場を知る

■実施内容（学生の報告書より）

<10月8日（1日目）>

- ・サミット会場見学・安芸市館観光・地元の方との交流会
- ・高知県安芸市到着後、じゃこサミット会場にて試食、安芸市観光（弥太郎生家等）、じゃこサミット運営者様との懇親会（ヒアリング調査）
- ・イベント会場を楽しむ、安芸市を観光、イベント関係者の方々と懇親会
- ・安芸市の観光、見学、実行委員会の方達との懇親会

<10月9日（2日目）>

- ・サミットボランティア
- ・じゃこサミット会場ボランティア
- ・イベントのお手伝い
- ・じゃこサミットの運営ボランティア

■参加学生がプロジェクトを通して学んだこと

- ・3点学んだことがある。それは①持続可能性、②組織形態、③雰囲気だ。①は、出店者に対する出店料の設定（売り上げの10%）や交通費の支給（7～10万円）で、出店者の利益確保ができるような体制になっている。印象的だったのは、60歳過ぎのじゃこ漁師さんが「利益が出て出店者さんが儲からないと、そもそもだめだからね」と言っていたこ

とだ。地域の全員が、町おこしの持続可能性まで理解できていると思った。②は地域ごとに町おこしの組織が変化するということだ。今回は女性が先頭に立ってプロジェクトを仕切っていて、私は地方でこそ男性社会が色濃く残っているのかと想像していたので意外だった。③はボランティアを全面的に歓迎してくださる地域の雰囲気についてだ。特に交流会では、私が自己紹介をすると「●●ちゃんじゃこ〜」と喋って声を掛けてくださって嬉しかったし、イベントの当日のみ参加する、ある意味”いいとこ取り”な私たちでもあたたかなムードで迎えてくださったのでとてもほっとした。このようなあたたかく・ゆるい雰囲気のおかげで、私たちがボランティアをする際は列整理にとどまらず宣伝をするなど、自由に生き生きと楽しく活動することにつながったと感じている。

- ・ボランティアスタッフとして参加した際、宣伝担当した吉野川ハイウェオアシス様の「じゃこタルタル阿波尾鶏とり天」が全体15店舗のうち5位にランクインし、とても嬉しかったのですが、それ以上に、出店に対する熱い思いに少しでも尽力できたことは、とても貴重な機会だったと思いました。宣伝の前になぜ参加されたのかという話をお聞きしたところ、徳島県の阿波尾鶏のおいしさをもっといろんな人に知ってもらいたいということを語っていらっしゃいました。また、徳島県=阿波尾鶏にしていきたいという思いも話しており、食べ物は違うとしても、各店が熱い思いをもって出店しているのだということを感じました。

また、じゃこサミットに関しては、ヒアリング調査の結果、「第一回目のじゃこサミットとは全く雰囲気が違う」ということをお聞きしました。それは規模感も知名度も大きくなってきたこと、続けてきた過程で大きくなる熱意、そして組織体制の定着化など、さまざまな要因がそうさせたかと仰っていました。ただ単に有名にさせたい、という思いでがむしゃらに行動するのではなく、地域ブランド化成功のためには組織体制や情報発信方法などマーケティング力が極めて重要なのだと痛感しました。

- ・このプロジェクトに参加して学んだことは、大きく分けて二つある。
 - 一つ目は、外部コンサルタントが地域活性化に与える影響の大きさである。彼らは専門的な知識など”コンサルタント”として地域に与える影響もさることながら、その存在そのものが与える影響も大きいと知った。地域という狭いコミュニティーのなかでは、必ず人間関係のしがらみが存在する。それを上手く排除し、地域活性化という目標に向かって物事を進めていく際にはそういった外部からの人、いわゆる”よそ者”が欠かせないと学んだ。
 - 二つ目は、実際に現場に赴くことの大切さである。授業を受け過疎化について少なからず知識を持っていたが、実際に過疎地域に行き現地の人の話を聴くとその何倍もの知識を得ることができた。現場に赴き、自分なりの考えを持つことがより深い学びに繋がると知った。
- ・第一はまちづくりに対しての、地域の人の気合いの入り方について学ぶことが多かったです。年に一度の地域全体を巻き込んだ事業で、市内や市外、県外からのお客さんを迎

えます。関西の都市部などでは、1つの事業に対して、地域全体が盛り上がり、迎える体制が整うことは少ないと思います。

第二は高知県の様々な文化についてです。

1日目の夜の懇親会で、高知県ならではの「返杯」や「菊の花」などを学びました。その際に伺った「高知は南を太平洋、他の三方を四国山地に囲まれているから独特な文化が育ってきた。方言の一部には平安時代からの言葉も残っている」という話が忘れられません。

- ・私がフィールドワークを通じて感じたことは地域振興において「資源」と「人材」が重要であるということである。資源では今回、じゃこを使った地域活性化運動を行った。安芸市でははずも日本1の生産量を保っており、資源選びは重要なテーマだったと感じる。結論、じゃこを選んだ理由は利便性があり、料理の使用において可能性が高い点だろう。じゃこは料理の用途で主役にも脇役にもなることができ、工夫次第では大ヒット商品を生み出すこともありえるだろう。今年、どろめ丼が優勝したが、将来安芸を代表する料理としてちりめんおこげなども可能性を高く感じた。これからのじゃこの可能性として、じゃこサミットから安芸を代表する料理が生み出されることを期待したいと思う。

二つ目は人材である。今回、じゃこサミットでは女性の方が指揮をとられていた。人口減少と共に衰退が進む地域において、リーダーとしてお金持ちの男性ではなく、明るく情熱的且つ庶民的な彼女だったからこそ、これほど多くの方がボランティアとして協力したのではないかと思う。加えて、彼女は周りの人への気配りも素晴らしく、発言にも常に一貫性があった。協力する人々も「安芸の良さを伝えたい!」「じゃこのおいしさ、可能性を伝えたい!」など強い志を持っていた。地域振興運動に関して、資源選びだけでなく、人材も大きな鍵になると感じた。東京一極集中が進み、地方創生の重要性が高まる中、地方に眠る経営資源をフル活用し、日本経済の成長を進めることに期待したいと思う。

■今後の学生活動について（活かしたいこと、課題）

- ・今後活かしたいことは3点ある。それは①人とのつながり、②人との交流、③楽しむことである。①は市川先生からのレクチャーでもあったが、プロジェクトの基本はやはり人であるということだ。確かに人との関係性が強固であれば、計画が難航したときや思わぬハプニングにもチームで対応し乗り切ることができる。そのためにも日ごろからの信頼が重要になってくると思うので、私もまずは社交性や、自分から人に声をかけ仲良くなるような積極性を心がけていきたい。②は、実際私は1人行動が気楽で好きだが、1人では”気づき”はあっても”学び”は無いと感じている。今回は特に宿泊あり1泊2日のプロジェクトだったが、一日中一緒にいるとメンバー同士お互いに良い部分や悪い部分が見えてくる。これは日ごろの自分を振り返るのに丁度よく、貴重な機会だったと

思う。そこで今後も”交流”活動に優先して取り組みたい。③は私たちには”若さ”という武器があることだ。楽しく生き生きと活動する若い姿こそ、知識や経験不足である私たちのウリだと思う。よって今後新たな環境や例え逆境にあっても、その場で「いかに楽しむか、”私から”その場をどのように楽しくしていくか」を意識したい。

- ・地域ブランド化にはマーケティング力が極めて重要だと先ほども述べましたが、他の地域ではどのような施策を取りながら地域ブランド化を進めているのかということも解剖してみたいと興味をもちました。また、研修中の勉強会で、ブランドの対象であるそのもの（本研修でいう“じゃこ”）ではなく、そのものが持つストーリーが大切だということを知り、今後はどのようなストーリーを持っているのかということに着目しながら資源やテーマを見ていきたいです。さらに、地域ブランド化に欠かせない“人”の力の偉大さを痛感しました。特に、じゃこサミット運営委員長の仙頭さんが終始「じゃこ語」を話しておられ、その曲がらない信念と、じゃこを何としても広げたいという思いに感動しました。その人にしかできない、リーダーの在り方を模索することも、大きな組織を引っ張っていくためには重要なのだと感じました。

- ・今回のプロジェクトに参加したことで、現場に赴く大切さについてもう一度確認することができた。大学生という自由に使える時間があるうちに、社会問題が起こっている現場に赴き、自分なりの考えを持てるようにしたいと思う。

課題については、準備不足であったという点だ。もう少し地域活性化についての知識をつけた状態で参加していたら見えるものがまた違っていただかもしれない。またこのような機会があれば、次は準備を怠らないよう注意したい。

- ・今回の経験をもとに、地方の活性化についてより深く学習を進めたいです。地方と都市部でのまちおこしに対する意識の差や、主催者の違いなどを勉強しました。地方では自治体などが費用を負担するのに対して、都市部では民間が負担する。だから地方と都市部では採算に対する意識が違うなどを理解しました。

また、文化が生まれる背景などの勉強にも取り組みたいです。

どのような歴史があり、それは何故生まれたのか。地理的な要因なのか、外部的な要因なのか。地域々々の深い勉強をすることで、県民性などが理解できて、まちおこしに繋がると思います。